

## 地方の公共交通が危うい！ 使ってみようバスや電車を

【公立大学法人名桜大学特任教授・玉川大学名誉教授 寺本潔】

雑誌『中央公論』6月号は「消滅する市町村 744 全リスト」と題する特集だった。既に10年前から顕著となってきた人口減少がやまない。特に若い女性の地方県からの流出が予想以上に強まっている傾向も論じられている。NHKでも特集され、子育て支援の充実策だけでは流出を防げないことも懸念されている。その中で公共交通の維持も見過ごすことができない。富山市や宇都宮市では立派なライトレールが走り市街地の利便性が増してきている。また、高齢化の進展や若者の車離れも相まって路面電車が昔から走っている都市では利用への見直しも起きてきた。しかし、地方の路線バスの経営や運転手不足は深刻になり、自治体は税金を投入しコミュニティバスを運行しているものの、利用者は伸び悩んでいる。もっと、市民に親しんでもらえるバスや電車に変えていく必要がある。モビリティ・マネジメント教育(MM教育と略)はそうした意識を高めていくための役割も持っている。単にCO2削減や渋滞緩和という役目だけが公共交通のメリットではない。市民のシビックプライドを高める役割も担っている。とりわけ、コミュニティバスは愛称が付けられ、ラッピングも美しいバスが登場してきた。乗ってみると実に快適だ。もちろん、自家用車で目的地に行くことに比べると遠回りのコースを辿るが座席が高く視界もいい、空調も聞いており、何といても料金が安価でしかも安全だ。移動中、スマホや本も読める。MM教育でコミュニティバスが学習材として取り上げられることは少ないが、地方創生の観点に直結する最も身近な公共交通手段としてもっと注目すべきではないだろうか。コミュニティバス車内に自分の子どもの図画作品が展示されていたら迷わず見に乗車するだろう。バス停案内アナウンスの声が地元の生徒さんの美声だったらもっと嬉しい。バス待合室が試験勉強もできるラウンジのような雰囲気だったら中高生や大学生も長居するだろう。やれることはたくさんありそうだ。公共交通を使う気持ちを公教育でもっと育てたい。